

講義録レポート

講 座	証券アナリスト	科目①	証券分析
目標年	2011年合格目標	科目②	
コース	1次 直前対策セミナー	回 数	1 回

収録日	2010 年 12 月 17 日		
講師名	山岡 先生	講義録 枚数	/ 枚 ※レポート 含まず
		補助リジュメ 枚数	/3 枚 (サイズ)

講義構成	講義 (32) 分		
使用教材	①		
	②		
	③		
	④		
配布物	有 <u> </u> 無 <u>()</u>		
	①		
	②		
	③		
正誤表	有 <u> </u> 無 <u>()</u>	枚	
備考			

証券アナリスト講義録		科目 証券分析	コース 1次 直前期セミナー	回数 /
------------	--	------------	----------------------	---------

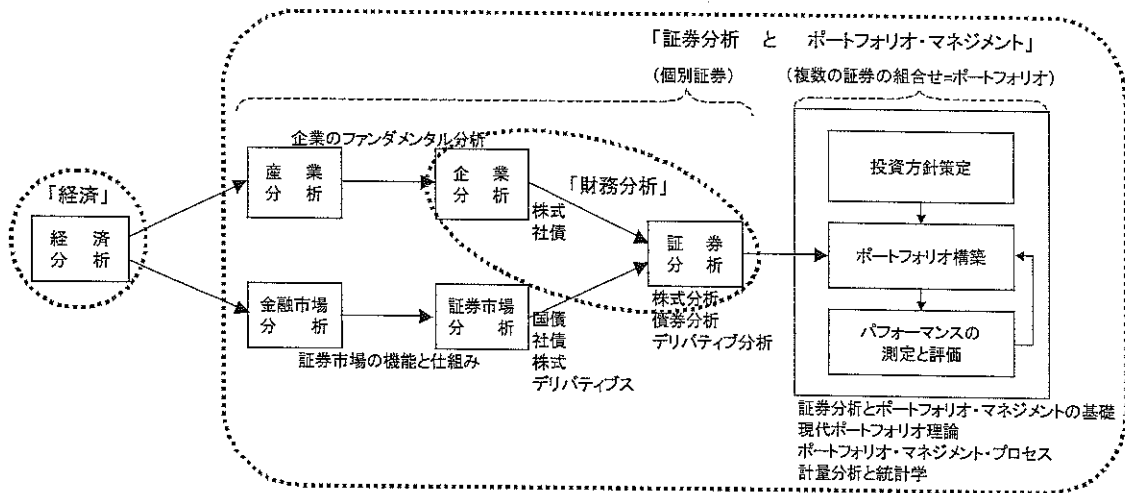
配布物	★ミニテスト：あり [] なし ★実力テスト：あり [] なし ◇配布物なし	★答 練：問題用紙・解答用紙・解答解説 ★その他のレジュメ []	講師 山岡 先生
-----	--	--------------------------------------	-------------

テキスト ページ	黒 板 内 容
	経 済 者 ↓ 経済環境 投資環境 ↓ 株式？ 社債？ ← 企業のファンダメンタル or 債券？ ↓ 国債？ 金融 証券市場 発行市場 株式市場 金融機関 流通市場 公社債市場 取引所 産業動向分析 ↓ 財務諸表分析 会計処理 ↑ 財務分析 ・第1問～第6問 全6問構成 180分 180点満点 第1問：証券市場の機能と仕組み … 各1点×15問 第2問～第6問：(I)(II)～(V) セクションに分割 ※(I)は制度仕組み理論の正誤問題が多い (II)～計算問題中心 ・基本的な考え方 現在価値 → 債券・株式（理論株価） 無裁定 → デリバティブス 分散効果 → ポートフォリオ・マネジメント

証券アナリスト試験1次 直前期対策セミナー

- 証券分析とポートフォリオ・マネジメント -

● 企業調査、証券分析～ポートフォリオ構築まで：アナリスト試験の内容との関係



● 証券分析とポートフォリオ・マネジメントの主な内容

(協会通信テキストの配本)

- 1 証券分析とポートフォリオ・マネジメントの基礎
(証券投資のリターンとリスク、リターンとリスクの計測、ポートフォリオ理論の基礎)
- 2 計量分析と統計学 (I)
(証券分析で使う数学、統計学の基礎、回帰分析とベータ)
- 3 現代ポートフォリオ理論
(投資家の選好、ポートフォリオ理論、CAPM、マルチファクター・モデルとAPT、リスクニュートラル・プライシング、市場の効率性)
- 4 証券市場の機能と仕組み
(証券の種類、証券市場の仕組み、証券発行市場、証券流通市場、証券市場のプレイヤー:証券会社と機関投資家)
- 5 企業のファンダメンタル分析 (産業分析と企業分析、主要な財務分析指標、主な企業分析手法)
- 6 株式分析 (配当割引モデル、株式価値算定の3つの等価アプローチ)
- 7 債券分析 (債券のキャッシュフローとその評価、様々な利回り概念、金利の期間構造、債券投資のリスク、信用リスクと格付け)
- 8 デリバティブ分析 (デリバティブとは、デリバティブの仕組みと価格形成、わが国のデリバティブ市場、投資戦略への応用)
- 9 ポートフォリオ・マネジメント・プロセス
(ポートフォリオ・マネジメント・プロセスの概要、アセット・アロケーション、マネジャー・ストラクチャー、個別証券ポートフォリオ、パフォーマンス測定と評価)

● TAC 総まとめテキストと協会通信テキストとの対応関係

TAC 総まとめテキスト	協会通信テキスト
第 1 章：現代ポートフォリオ理論	1) 証券分析とポートフォリオ・マネジメントの基礎 2) 計量分析と統計学(1) 3) 現代ポートフォリオ理論 9) ポートフォリオ・マネジメント・プロセス
第 2 章：債券分析	7) 債券分析
第 3 章：ファンダメンタル分析	5) 企業のファンダメンタル分析
第 4 章：株式分析	6) 株式分析
第 5 章：デリバティブ分析	8) デリバティブ分析
第 6 章：証券市場の機能と仕組み	4) 証券市場の機能と仕組み

● 出題傾向

平成 22 年春（大問 6 問，合計 103 問） 180 分

問 題	分 野	内 容	理 論
第 1 問	日本の証券市場 (15 問：15 点)	証券市場の機能と仕組み	※制度など
第 2 問	企業のファンダメンタル分析 (17 問：30 点)	個別銘柄の分析・評価	財務分析
第 3 問	株式分析 (15 問：30 点)	個別銘柄の分析・評価	現在価値
第 4 問	債券分析 (19 問：35 点)	個別銘柄の分析・評価	現在価値
第 5 問	デリバティブ分析 (17 問：30 点)	個別銘柄の分析・評価	現在価値，無裁定
第 6 問	ポートフォリオ・マネジメント (20 問：40 点)	・証券分析とポートフォリオ・マネジメントの基礎 ・現代ポートフォリオ理論 ・ポートフォリオ・マネジメント・プロセス	・(リスク)分散効果 ・投資家の選好 ・パフォーマンス評価

* 選択問題（四者ないし五者択一）

平成 21 年（春）～平成 22 年（秋）

問 題	分 野	平成 21 年 （春）	平成 21 年 （秋）	平成 22 年 （春）	平成 22 年 （秋）
第 1 問	日本の証券市場	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)	15 問 (15 点)
第 2 問	企業のファンダメンタル分析	17 問 (30 点)	18 問 (30 点)	17 問 (30 点)	18 問 (30 点)
第 3 問	株式分析	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)	15 問 (30 点)
第 4 問	債券分析	20 問 (35 点)	20 問 (35 点)	19 問 (35 点)	18 問 (35 点)
第 5 問	デリバティブ分析	17 問 (30 点)	15 問 (30 点)	17 問 (30 点)	19 問 (30 点)
第 6 問	ポートフォリオ・マネジメント	20 問 (40 点)	21 問 (40 点)	20 問 (40 点)	20 問 (40 点)
合 計		104 問 (180 点)	104 問 (180 点)	103 問 (180 点)	105 問 (180 点)

- 全体で 105 問前後・180 点満点
- 第 1 問は例年 15 問・15 点（各 1 点）
- 第 2 問～第 6 問は（Ⅰ）（Ⅱ）～（Ⅴ）といったセクションに分割

第 1 次レベル（2010 年度）スタディ・ガイドより抜粋

	試験時間	出題内容・範囲	出題形式 ^(注)
第 1 次試験 （科目別）	経済：90 分 財務：90 分 証券分析とポート フォリオ・マネジメ ント：180 分	- 証券分析業務に必要な基礎的な知識および分析力を問う。 - 原則として通信テキストから出題される。	- すべての正解が 1 つの客観問題（計算問題、穴埋め問題を含む選択肢問題）。 - 答案用紙にマークシートを使用。
第 2 次試験 （総合）	4 科目総合：420 分 （うち職業倫理・行為基準 60 分）	- 証券分析業務に必要なより高度の知識と実務への応用力および職業倫理の習得を問う。 - テキストの内容が必ずしもそのまま引用されるわけではない。	- 計算問題等も一部に出題されるが、大部分が記述式の応用問題。 - 正解は 1 つとは限らず、採点に際して解答に至る論旨展開が重視される。

（注）各問題の冒頭には、問題ごとの配点（＝解答に要する時間の目安、1 分＝1 点）が示されており、その配点合計は試験時間（分単位）と一致する。

(参考問題) TAC2011 合格目標：基礎答練

第1問 株式分析

問1 A社株式の現在の時価総額は80億円である。同社の今期の当期純利益が5億円と予想されているとすると、同社の今期予想株価収益率（PER）はいくらになりますか。

- A 16倍
- B 20倍
- C 24倍
- D 28倍
- E 40倍

問2 問1において、A社のROEは10%であった。A社の株価純資産倍率（PBR）はいくらになりますか。

- A 0.8倍
- B 1.0倍
- C 1.2倍
- D 1.6倍
- E 2.0倍

解答 問1 A 問2 D

問1

$$PER = \frac{\text{株価} (\times \text{発行株式数})}{EPS (\times \text{発行株式数})} = \frac{\text{株式時価総額}}{\text{税引後当期純利益}} = \frac{80 \text{億円}}{5 \text{億円}} = 16 \text{倍}$$

※EPS=1株当たり当期純利益 (Earnings Per Share)

問2

$$PBR = \frac{\text{株価} (\times \text{発行株式数})}{BPS (\times \text{発行株式数})} = \frac{\text{株式時価総額}}{\text{自己資本(純資産)}}$$

※BPS=1株当たり純資産 (Book-value Per Share)

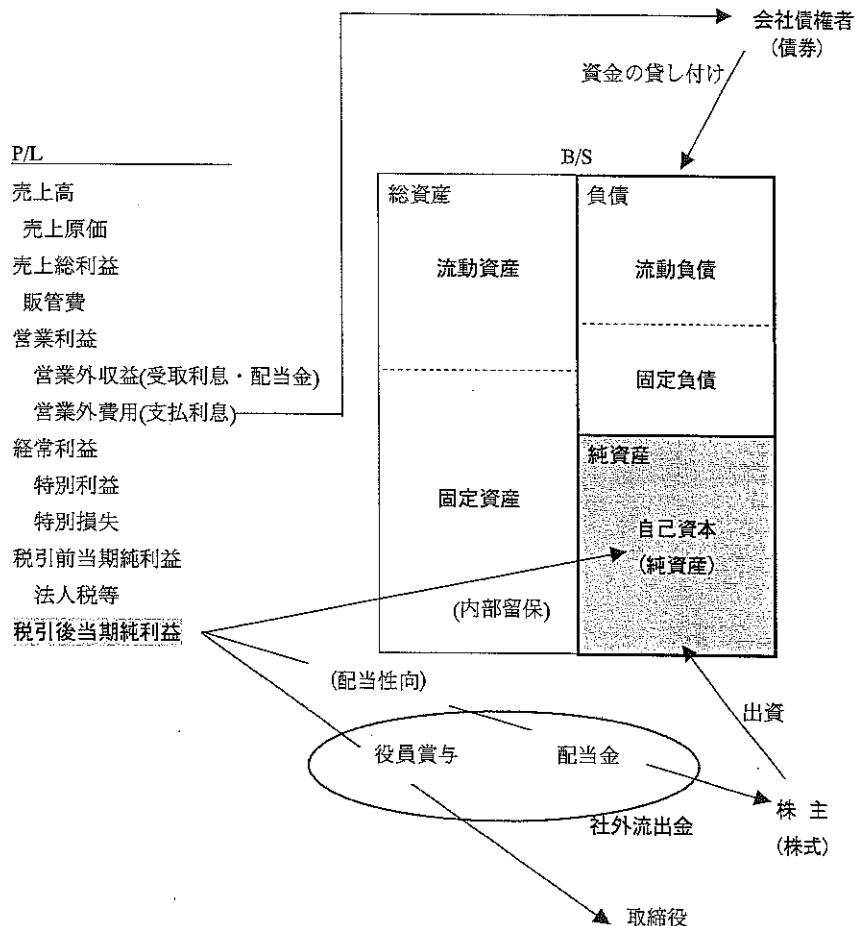
$$ROE = \frac{\text{税引後当期純利益}}{\text{自己資本}} \quad 10\% = \frac{5 \text{億円}}{\text{自己資本}} \quad \Leftrightarrow \quad \text{自己資本} = \frac{5 \text{億円}}{0.1} = 50 \text{億円}$$

$$PBR = \frac{80 \text{億円}}{50 \text{億円}} = 1.6 \text{倍}$$

第2問：企業のファンダメンタル分析

第3問：株式分析

※) このあたりは「財務分析」と密接です



● 企業のファンダメンタル分析

収益性の分析

財務安全性の分析

キャッシュフロー分析

● 株式分析

株価指標

1株当たり当期純利益 (EPS) ⇔ 株価収益率 (PER)

1株当たり純資産 (BPS) ⇔ 株価純資産倍率 (PBR)

株式価値評価 (現在価値)

配当割引モデル, 残余利益モデル, キャッシュフロー割引モデル

第6問：証券分析とポートフォリオ・マネジメントの基礎（現代ポートフォリオ理論）

基本統計量

(1)リターン

①期待値(期待収益率)： $E[R]$

(2)リスク

②分散： $\sigma^2, \text{var}(R)$ ③標準偏差： σ

(3)2証券の関係

④共分散： $\text{Cov}_{X,Y}, \sigma_{X,Y}$ ⑤相関係数： $\rho_{X,Y}$

(1) リターン

投資収益率 (R)

$$R_x = \frac{\text{売却価格} - \text{購入価格} + \text{配当金}}{\text{購入価格}}$$

(注: 売却価格 = 現在の株価 + 1年後の株価, 配当金 = 1年後の配当金)

証券A

現在の株価	1年後	
	株価	配当金
1,000円	1,040円	20円

$$R_A = \frac{(1,040 - 1,000) + 20}{1,000} = \frac{1,060 - 1,000}{1,000} = 0.06 = 6\%$$

① 期待値

証券A (買おうか?)

今後1年間の景気見通しについて...

景気の状態	確率 (P)	各状況における投資収益率
好 況	30%	+15%
普 通	50%	+6%
不 況	20%	-15%
合 計	100%	???

$$\begin{aligned} ??? &= 0.3 \times (+15\%) + 0.5 \times (+6\%) + 0.2 \times (-15\%) \\ &= +4.5\% \\ &= E[R_A] \end{aligned}$$

証券Aの収益率の期待値(期待収益率)

期待値 $E[R_X]$: Expected Value

$$E[R_X] = \sum P_i R_{X,i}$$

このケースでは..

$$E[R_X] = (P_{\text{好況}} \times R_{X,\text{好況}}) + (P_{\text{普通}} \times R_{X,\text{普通}}) + (P_{\text{不況}} \times R_{X,\text{不況}})$$

= (各状況の起きる確率 × 各状況における投資収益率) の合計

※ 「期待値」という用語は平均値とほぼ同義に用いられますが、データの平均は期待値と呼びません。

- 証券 A に加えて証券 B への投資を考えます。

景気の状態	確率 (P)	各状況における投資収益率	
		証券 A	証券 B
好 況	30%	+15%	-40%
普 通	50%	+6%	+20%
不 況	20%	-15%	+80%
合 計	100%	+4.5%	$E[R_B]$

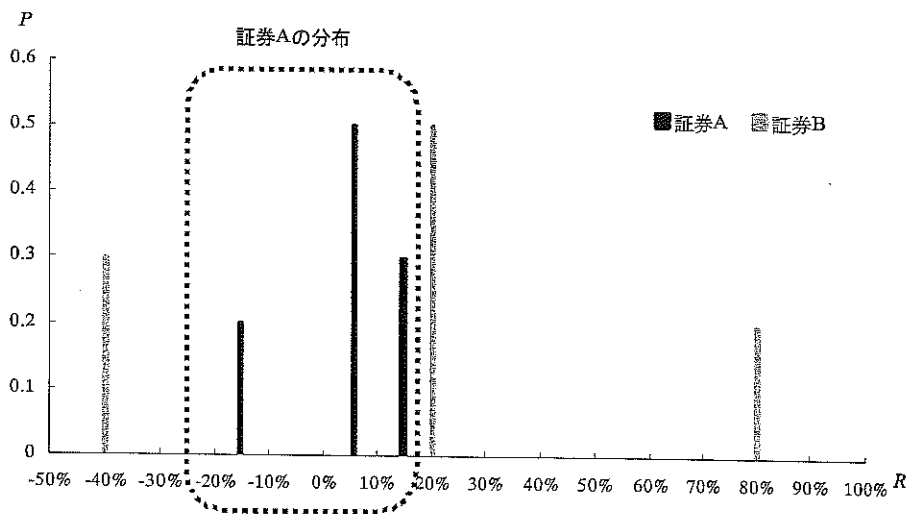
$$E[R_B] = 0.3 \times (-40\%) + 0.5 \times (+20\%) + 0.2 \times (+80\%)$$

$$= +14\%$$

とりあえず、リターン(期待収益率)は証券 A よりも高いのですが...

(2) リスク

- 確率分布



証券Aと証券Bを比較してみると、グラフからは証券Bの方が分布のばらつきは大きな「感じ」がします。

② 分散(期待値からのばらつき)

景気の状態	確率 (P)	証券 A	証券 B
好 況	30%	$0.3 \times (+0.15 - 0.045)^2$	$0.3 \times (-0.40 - 0.14)^2$
普 通	50%	$0.5 \times (+0.06 - 0.045)^2$	$0.5 \times (+0.20 - 0.14)^2$
不 況	20%	$0.2 \times (-0.15 - 0.045)^2$	$0.2 \times (+0.80 - 0.14)^2$
合 計	100%	=0.011025	=0.1764

$$\begin{aligned} \text{証券 A の分散 } \sigma_A^2 &= 0.3 \times (+0.15 - E[R_A])^2 + 0.5 \times (+0.06 - E[R_A])^2 + 0.2 \times (-0.15 - E[R_A])^2 \\ &= 0.3 \times (+0.15 - 0.045)^2 + 0.5 \times (+0.06 - 0.045)^2 + 0.2 \times (-0.15 - 0.045)^2 \\ &= 0.011025 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \text{証券 B の分散 } \sigma_B^2 &= 0.3 \times (-0.40 - E[R_B])^2 + 0.5 \times (+0.20 - E[R_B])^2 + 0.2 \times (+0.80 - E[R_B])^2 \\ &= 0.3 \times (-0.40 - 0.14)^2 + 0.5 \times (+0.20 - 0.14)^2 + 0.2 \times (+0.80 - 0.14)^2 \\ &= 0.1764 \end{aligned}$$

分散 σ_X^2 , $\text{var}(R_X)$: variance

$$\begin{aligned} \sigma_X^2 &= \sum P_i (R_{X,i} - E[R_X])^2 \\ &= E[(R_{X,i} - E[R_X])^2] \end{aligned}$$

このケースでは..

$$\begin{aligned} \sigma_X^2 &= P_{\text{好況}} \times (R_{X,\text{好況}} - E[R_X])^2 + P_{\text{普通}} \times (R_{X,\text{普通}} - E[R_X])^2 + P_{\text{不況}} \times (R_{X,\text{不況}} - E[R_X])^2 \\ &= \left[\text{各状況の起きる確率} \times \underbrace{(\text{各状況における投資収益率} - \text{期待収益率})^2}_{\text{偏 差}} \right] \text{の合計} \end{aligned}$$

③ 標準偏差

ばらつき具合を表す統計量として分散の平方根をとったものを確率変数 x の標準偏差 (standard deviation) といい, σ_x などで表します。

$$\begin{aligned}\text{証券 A の標準偏差} \quad \sigma_A &= \sqrt{0.011025} \\ &= 0.105 \\ &= 10.5\%\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}\text{証券 B の標準偏差} \quad \sigma_B &= \sqrt{0.1764} \\ &= 0.42 \\ &= 42\%\end{aligned}$$

標準偏差 σ_x : standard deviation

$$\sigma_x = \sqrt{\text{var}(R_x)}$$

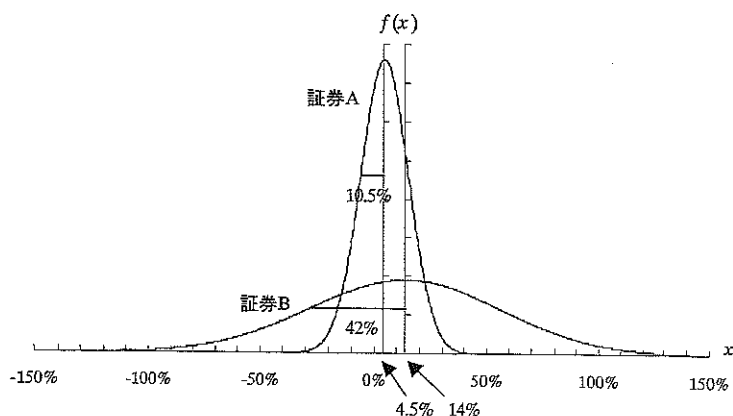
一般的に、ポートフォリオ理論で「リスク」と言った場合、この収益率の標準偏差を指します。

以上のことから、リターン（期待収益率）は証券 A よりも証券 B の方が高いのですが、同時に、リスク（収益率の標準偏差）も証券 A よりも証券 B の方が高いことがわかります。つまり、証券 A と証券 B を比べてみると、証券 A はローリスク・ローリターン、証券 B はハイリスク・ハイリターンということがわかります。

● 正規分布

証券 A と証券 B の収益率が正規分布に従うと仮定すると以下ようになります。

	期待収益率	標準偏差
証券 A	4.5%	10.5%
証券 B	14.0%	42.0%

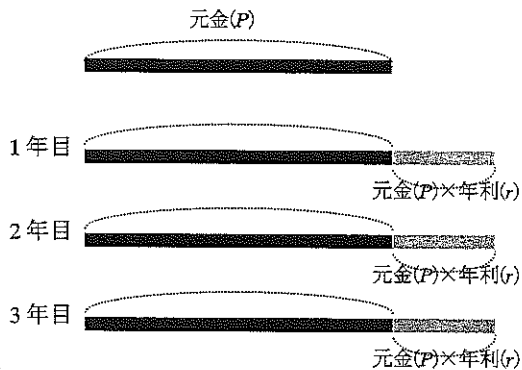


第 4 問：債券分析

■ 投資の基礎概念

1. 単利と複利

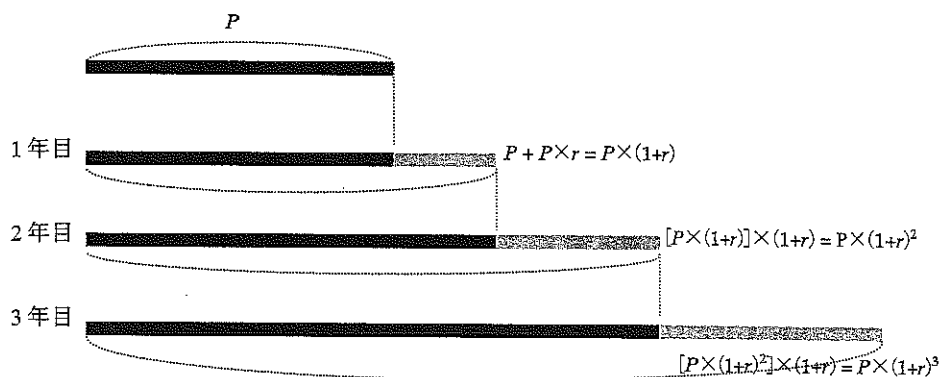
(1) 単利:元金（元本）のみが生む利息 → 利息に対する利息（再投資収益）を考慮しない



$$3 \text{ 年目の元利合計} : P + 3 \times (P \times r) = P \times (1 + 3r)$$

$$n \text{ 年目の元利合計} : P \times (1 + nr)$$

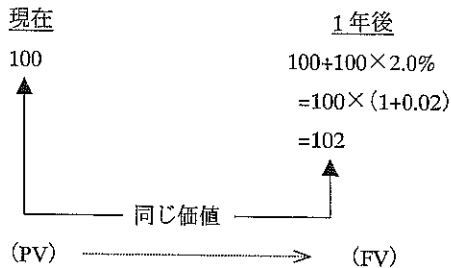
(2) 複利:利息を元金(元本)に加えて次の期間の利息を計算 → 再投資収益を考慮する



$$3 \text{ 年目の元利合計} : P \times (1 + r)^3$$

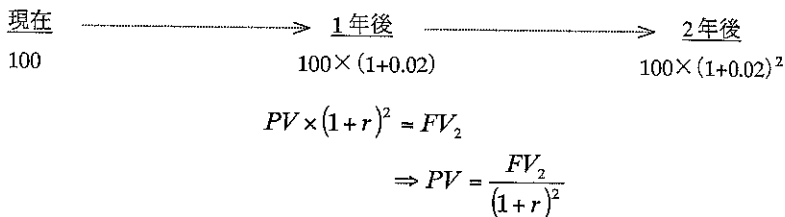
$$n \text{ 年目の元利合計} : P \times (1 + r)^n$$

2. 現在価値 (PV; Present Value) と将来価値 (FV; Future Value)

現在: 100 円 (B/K 利子率 r : 年 2.0%)

$$\begin{aligned} \text{現在価値 } PV \times (1 + \text{利子率}) &= \text{1年後の将来価値 } FV_1 \\ PV \times (1 + r) &= FV_1 \\ \Rightarrow PV &= \frac{FV_1}{1 + r} \end{aligned}$$

2 年に拡張

 n 年に一般化

$$\begin{aligned} PV &= \frac{FV_n}{(1 + r)^n} \\ &= \frac{1}{(1 + r)^n} \times FV_n \end{aligned}$$

Discount Factor (割引係数)

PV : 現在価値, FV_n : n 年後の将来価値, r : 割引率

3. 内部収益率 (IRR; Internal Rate of Return)

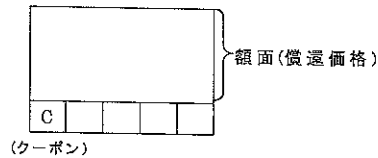
- ・ 今, 10,000 円投資すると 2 年後に元利合計で 10,404 円戻ってくる
- ・ この投資案件の 1 年当たりの平均投資収益率は...

$$\begin{aligned} 10,000 &= \frac{10,404}{(1 + r)^2} \quad (1 + r)^2 = \frac{10,404}{10,000} \\ r &= \sqrt{\frac{10,404}{10,000}} - 1 \\ &= 0.02 \end{aligned}$$

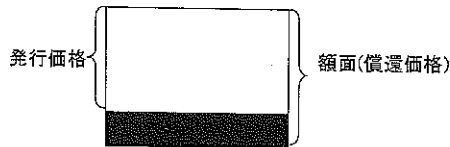
■ 債券

(1) 債券の種類

利付債（クーポン債）：発行後に定期的にクーポン（利金）の支払いがある。



割引債（ゼロクーポン債）：額面（償還価格）よりも低い価格に割引いて発行される。



(2) 利回りの計算

利率: クーポン・レート（額面に対する利金の割合）

例) 額面: 100 円
 年利率: 5% ⇒ 年 5 円のクーポン

利回り: 1 年当たりの平均投資収益率（*同じレートで再投資可能と仮定）

債券の収益（3つ）： ①利息収入（クーポン収入）
 ②クーポンの再投資収益
 ③償還差益

●複利最終利回り（ytm ; yield to maturity）

- ・クーポンの再投資収益を考慮する（同じレート r で再投資）← *実はかなり無理な仮定
- ・満期(maturity)まで保有
 ⇒ 投資元本に対して年率何%の収益を生み出したか？

■ 債券価格と複利最終利回り（ytm ; yield to maturity）

・利付債（年 1 回転化の複利計算 p.a.: per-annual）

$$P = \frac{C}{1+r} + \frac{C}{(1+r)^2} + \dots + \frac{C}{(1+r)^n} + \frac{F}{(1+r)^n}$$

$$= \sum_{t=1}^n \frac{C}{(1+r)^t} + \frac{F}{(1+r)^n}$$

・割引債

$$P = \frac{F}{(1+r)^n}$$

P : 債券価格, C : クーポン額, F : 償還価格, r : 複利最終利回り, n : 残存年数.